



おかえりなさい、**政宗公**
「伊達の気概」ここにあり

特集 第3回

伊達政宗公の
夢をつなぐ

仙台藩祖伊達政宗公の騎馬像が3月末に戻った仙台城跡は、青葉城の別名に最もふさわしく、日に日に緑が濃さを増す季節を迎えた。初代が建立され、除幕式があったのは1935(昭和10)年5月23日。この88年間、仙台のまちは戦災や大震災に遭い、人々はさまざまな喜怒哀楽を心に抱きながら、政宗公を見上げたことだろう。企画を締めくくる特集第3回の主題は、現代人の心に生きる政宗公。行ってきます、頑張ろう、帰ってきたよ、よろしく、ありがとう——。今日も変わらず、そこにたたずんでいてくれて、よかった。おかえりなさい、政宗公。

平和と豊かさへの誓い

託された思いを未来へ

再三の窮地と再起 等身大の戦国武将

寄稿 佐藤 巖太郎さん(時代小説作家)

ゴールデンウィークも終盤の土曜、久しぶりに仙台・青葉山公園を訪れた。途中、白石で次作の主人公・片倉小十郎の墓参りにも立ち寄り、私の住む福島市からは約80キロの旅である。眼下で全国都市緑化仙台フェアが開催され、チューリップやツツジなど200種類の花が咲き乱れる中、青葉山公園の伊達政宗公騎馬像の周囲には、レンズを向ける人々が集まっていた。

改めて銅像を観てみると、馬の右前脚に動きがあり、全体として勇ましく躍動感にあふれている。しかし、政宗の歴史を知れば、むしろ観る者に迫ってくるのは、若くして家督を継ぎ、幾多の滅亡の危機に際しても、常に覚悟を怠らずに切り抜けた、そのくじけない精神性ではないか。

周囲の駐車場には異外ナンバーの車も目についた。コロナ禍が一息ついて、訪れる人も関東から関西にまで広がっている。東北の人々にとって身近にある政宗公像が、歴史を通じて全国民とつながる。この瞬間が歴史の醍醐味でもあり、仙台は面白い!と感じる時だろう。ハンドルを握る帰りの車の中で、華やいだ気分を味わえた。

思えば、実際の政宗本人も何度も死地から生還してきた。人取橋の戦い、小田原征伐連参、葛西大崎一揆扇動の疑い、



さとう がんたろう
1962年福島市生まれ。2011年「夢幻の扉」でデビュー。17年初の単行本「会津執権の栄誉」が直木賞候補、第7回本屋が選ぶ時代小説大賞受賞。他に「伊達女」など。同市在住



初代騎馬像もお披露目

宮城県連合青年団の提案により、伊達政宗公の没後300年を記念し、柴田町出身の小室達が原型となる石膏像を作成し、東京・伊藤精造所が铸造した。完成9年後の1944年、太平洋戦争の金属供出を目的に撤去されたが、戦後まもなく金属回収所で郷土史家石川謙吾が発見。当初は全身が残っていたものの、石川が買い取り資金を集める間に胸部以外は散逸したとの話もある。仙台市博物館に設置されていたが、この4月、青葉山追廻地区の公園整備に合わせ、仙台緑彩館脇に移された。現在の二代目は、小室の遺族が柴田町に寄贈した同じ原型から制作された。



青葉山公園追廻地区に移設された初代政宗公騎馬像(胸像)。全国都市緑化仙台フェアの開幕に合わせ4月26日に公開された。胸像の先には仙台城跡に立つ二代目騎馬像が見える。共に仙台城下に広がる市街地を見守るようにたたずむ

河北新報社では政宗公騎馬像の帰還を機に、その歴史的価値を検証するとともに、政宗公の偉業を伝える紙面・イベント・WEB連動シリーズ企画「おかえりなさい、政宗公 ～伊達の気概」ここにあり～」を展開しています。お戻りになった政宗公と共に、郷土の誇りと未来への展望を考える機会を創出いたします。

主催 河北新報社 協力 仙台市

特設WEBサイト公開中



おかえりなさい、政宗公 検索

https://www.kahoku.co.jp/ad/okaeri_masamune/

《掲載コンテンツ》●河北新報特集紙面 ●関連動画 ●過去記事
アーカイブ ●協賛紹介 ●メッセージ募集・紹介 ほか

本特集の感想などを各種SNSでハッシュタグ「#おかえりなさい政宗公」をつけて発信してください!

